Y08a　三年目となる宇宙天気インタプリタ育成カリキュラム開発の状況

野澤恵、高城有生 (茨城大学)、カリキュラム開発チーム

今年は太陽活動のピークを迎えると予想され、6 月初頭に大規模なコロナ質量放出 (CME) が発生し、日本各地で赤いオーロラの複数の確認報告があった。このように太陽活動の諸現象が電離圏や磁気圏など地球に与える影響のことを宇宙天気と呼ぶ。宇宙天気が与える被害に対して、社会的影響範囲の広さから宇宙天気の専門家だけでは社会システム全てに応ずることは難しい。宇宙天気に対応するためにはそれぞれの業界の専門家がリスク対応を正しく行う必要がある。そのため宇宙天気リスクを評価し、対応する宇宙天気インタプリタの育成が急務となっている。また宇宙天気をわかりやすく伝える人材 (宇宙天気キャスター) や、宇宙天気予報士の育成のためのカリキュラムが必要である。そこで、2023 年度から科研費基盤 C「宇宙天気予報を深化させた宇宙天気インタプリタ育成カリキュラムの開発」(23K02807、期間 5 年) に採択され、この実践を行なっている。

実践は三年目となり、昨年度は二つの目標を立て、初学者にも伝わる資料作成、講義内容を太陽から地球側の宇宙天気現象全般のテキスト作りを一つ目の柱とした。もう一つは、初年度から行なっている気象キャスター向け宇宙天気講座を継続的に行ない、上の宇宙天気キャスターの育成を目指している。二つは並行した講義となり、前者は大学院生を中心としたスライド資料を作り初等者向けの資料を作ることを目指し、宇宙天気をわかりやすくかみ砕いてはあるが、正しく宇宙天気を怖がるための内容とした。しかし、難易度の設定に苦しみ、太陽や磁気圏の物理的な現象の理解不足でテキストの完成は難しかった。これについては、初学者が能動的に学べる仕掛けや関心層を拡大するアプローチが必要であることがわかった。そこで、昨年度終りに、対象を限定した、宇宙天気インタプリタ養成講座を行なっている。本講演では、今までのまとめと今年度前期の評価などの報告も行なう。